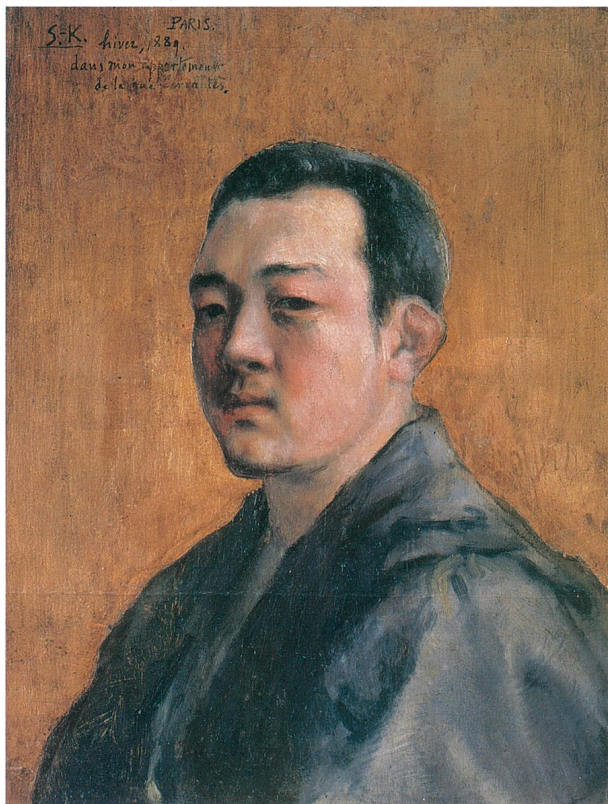


# グリーンルーフ

鹿児島市立美術館だより

館蔵品誌上ギャラリー⑤



黒田清輝「自画像」1889年  
(作品解説は4ページ)

## 鹿児島市立美術館

〒892-0853  
鹿児島市城山町4-36  
TEL. (099) 224-3400  
FAX. (099) 224-3409



Kagoshima City Museum of Art

### 表紙の作品

### 黒田清輝「自画像」(1889年)について

フランスに留学していた黒田はこの作品を描く2年前の1887年8月に法律の勉強を放棄し、絵画に専念する決意を固める。そして、翌1888年(黒田22歳)の1月、油彩画を始めるのだが、この年とその翌年の夏にベルギー・オランダを旅行し、ハーグでレンブラントの作品の模写を行っている。1888年の「トゥルブ博士の解剖学講座」(1632年)(図1)の模写に続き、翌年の1889年に模写したレンブラントの「羽根帽子をかぶった自画像」(図2)については、この年の9月12日付母宛書簡に「わたしがこんどうつすゑはひとつのかほです。こんなふうです これハもうあしたぐらいはかきとつてしまいますから」と記している。この文面と文中のスケッチ(図3)からは、レンブラントに寄せる思いの深さを感じることができる。

自画像はそもそも自らの心の内を探り、自己の存在について問い直す、といったような目的で描かれることが多い。そして、黒田がこの頃好んだオランダやベルギーなどアカデミックな写実性を重んじる北方の作家が好んで自画像を描いている。レンブラントは、まさにその代表的な画家の一人だと言える。彼はその生涯に多くの自画像を描いたことから厳しく自己を見つめ続けた画家と言われる。そしてこのレンブラントの自画像に触発され

た黒田はこの自画像の模写後間もなく、同年11月にこの自画像を描いたのである。和服の自画像からは、画家を志したばかりの黒田の強い決意と希望、一方先行きの見えない不安などが伝わってくるようである。画面左上の「S.K.Paris.Liver.1889.dans mon appartement de la rue Cervantes」という表記からセルバンテス街の新居に移った当初の制作と分かる。画家の道へ進もうとする新鮮な思いのほどがうかがえる作品である。

さてこの自画像の表現手法について特筆すべき点は、背景の金地である。日本画にも似た趣向に見えるが、前述のレンブラントの作品の背景の闇がすべての虚飾を廃するように、まさに23歳の黒田の素顔を浮き彫りにする背景と言えよう。この金地の背景は、後に抽象的な概念を裸婦像によって表現した代表作「智・感・情」(P3参照)に展開することになる。3人の裸婦を封じ込めるような金地は、後世にも影響を与えている。藤島武二の「天平の面影」(図4)や青木繁の「海の幸」などもその一つだと考えられる。

以上のように考えていくと、この自画像は画家黒田清輝にとって初期のものではあるが、すでに彼の本質が垣間見える意味の深い作品と言えるだろう。

(図1)



レンブラント「トゥルブ博士の解剖学講座」  
(ハーグ マウリツホイイス美術館蔵)

(図2)



レンブラント  
「羽根帽子をかぶった自画像」(黒田清輝模写)  
(東京芸術大学美術館蔵)

(図3)



文中のスケッチ  
(黒田清輝の書簡より)

(図4)



藤島武二「天平の面影」  
(石橋美術館蔵)